

2014年 CSA ワーキング・スタディ・ツアー  
参加者感想文(寄稿)

## 2014CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン ダイソー労働組合 鈴木 啓子

2回目のラオス。以前旅行で行った事がありとても好きな国。そんなラオスにまた行けると思っていなかったのが、今回お話をいただいた時は即答でOKしました。

中古衣類カンパは単組ですと活動してきましたが、その後どういう過程でどうなるのかということは全然知りませんでしたし、漠然と誰かのためになっているだろうという認識しかありませんでした。今回実際に倉庫や、分類の様子、衣類の引渡し式を見て、本当に私たちの送った衣類が役に立っているという確認ができました。またこの活動が、タイ・ラオスの人たちにとっても感謝されていることも実感しました。やってきて良かったという気持ちと、役に立ってたことへ安心もしました。ただ、分類作業は手作業なうえ、人数も少ないとのことで、膨大な量の衣類をさばくには効率が悪いのは否めません。また送られた衣類の中には古い服・破れた服、ボタンが取れた服もあって、そのような服は送れないので捨てるそうです。衣類を送れば良いという気持ちではなく、支援される人、それを支えるスタッフのことを思いながら取り組まなければいけないことを再認識しました。



フンペンさんと

一番印象に残ったのは、子どもたちの笑顔です。サンティパーブ高校寮での寮生との交流では、日本語で話しかけてくれる子、英語で話す子など一生懸命勉強している子が多いと感じました。勉強だけではなく民族舞踊も習っているため、みんな踊りが上手で終始リードされっぱなしでした。特に女子のパワーにはびっくり。ノリノリで踊っていました！！バーシーという儀式では、手首に紐を巻くときに心から相手の幸せを祈っているのが伝わってとても感動しました。温かい気持ちになったのを今でも覚えています。また、CSAが建設した小学校への訪問では、子どもたちと折り紙をしました。新聞で作ったカブトを頭にのせて喜んでいる子、飛行機を飛ばしている子、みんな笑顔でした。天井が壊れて雨漏りがしても、そこを避けて勉強していることや、学校から10kmも離れた所から学校に通っている子がいること、高校寮ではトイレが故障していること、小さい部屋に6人が一緒にいることなど必ずしもいいとは言えない環境下で、相手を思いやり勉強も頑張っている姿は本当に感心します。彼女たちのひたむきな姿とかわいい笑顔はずっと忘れません。同時に、いかに日本が恵まれているかを痛感し、日本人も見習わなければいけないことがたくさんあるように思いました。このツアーで、感じたこと、見たことをこれからの活動に生かしたいと思います。

最後に、今回のツアーではCSAの山岡事務局長、参加メンバーには大変お世話になりました。ラオスで通訳してくれたフンペンさん、エーさんにも親切にしてもらいました。とても楽しく充実したツアーになったのはみんなと一緒にだったからです。ありがとうございます！ラオスは本当にいい国。いろんな人にそう伝えたいし、絶対にまた行きます！

## 2014CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン アルペン労働組合 藤 沼 伸 一



高校生寮で

今回のワーキング・スタディ・ツアーの感想を一言でいうと、「ラオスって良い国だな。また行きたい!」です。

UAゼンセンとしては中古衣類・海外輸送費カンパを実施していますが、「アジア連帯委員会(CSA)はタイ、ラオスへの中古衣類の支援だけではなく、ラオスにおける小学校建設と遠隔地高校生のための奨学育英事業等々を行っているNGO」ということは知りませんでした。

ラオスという国に関する知識はほとんど無く、期待と不安を持ちながらの参加でした。

日程をこなしていく過程で、ラオスという国のことが徐々に分かり始め、日本でいうと明治維新後とか戦後間もない時期、という印象を持ちました。これは良い面も悪い面も含めた感想です。

その理由は、ラオスの国(国民)はお金をあまり持っていません。諸外国からの支援を多く受けている国です。しかしお金が無くても「貧困」とか「貧乏」とかという言葉が当てはまらないと感じました。彼らは仏教を中心に精神的に非常に豊かな国民です。物質的に豊かな日本人が忘れてしまったものを持っている国民だと思いました。

「教育と医療」という大きな問題点を抱えており、自立のためにはまだまだ時間はかかると思いますが、未来に希望を持った子どもたちが教育を受け、ラオス国家のために働ける人材が増えれば国は変わっていくと思います。

また忘れてはいけないことの一つとして、ベトナム戦争でアメリカ軍が投下したクラスター爆弾の不発弾が今でも900万個山中に眠っており、住民が不発弾の爆発事故で被害を受けているということです(2011年の実績で負傷51名、死亡13名)。今のペースで除去を進めると100年はかかると言われています。(アメリカ軍は沖縄から飛び立ち、ラオスにクラスター爆弾を投下しました・・・)この事実はラオスにとって非常にハンデがあるということです。

今回のツアーでは、「支援」とはなんだろう。とつくづく考えさせられました。「支援する側」は一方向的な思いで支援するのではなく、「支援される側」のニーズをきちんとつかんだ上で支援すべきだと思いました。

冒頭にも記載しましたが、CSAでは小学校建設と遠隔地高校生のための奨学育英事業を行っています。特に小学校建設においては24校建設という実績を持っていますが、今回のツアーで視察に行ったトナミ村小学校(首都ヴィエンチャンから車で約3時間)は建設から15年以上が経過し、維持管理ができておらず、見るも無残な状況となっていました(44頁写真参照)。雨季と乾季がある国なので、「維持管理」ということが苦手な国民性もあるのかなと感じましたが、建設～

維持管理（NGO、行政、先生、住民等も関与した）をパッケージ化した支援が大切で、特に現状を見ると新たな小学校の建設よりも過去に建設した小学校の修理に注力すべきだと思いました。トナミ村小学校ではせっかく作ったトイレが使えません。これは乾季には井戸が枯れてしまい水が流せない為、パイプが破損しても修理せずそのまま風化……。いまはゴミダメとなっており、非常に悲しい思いがしました。

サンティパーブ高校の寮にしても、10年以上が経過しており、良い環境を維持（もはや問題点は山積していると思われそうですが）するために補修等が必要な状況となっています。

UAゼンセンとしてはCSAに対して中古衣類・海外輸送費のカンパ活動のみを行っていますが、ラオスの現状を見た私としては「教育部門」への金銭的な支援も必要なのではないかと思いました。

教育を受けたいけれども受けられない子どもたちへの新たな支援や、遠隔地の大家族で（とはかぎらないかもしれませんが）、1枚の衣類は買えるけれども、2枚、3枚は買えない家庭への衣類提供。このような支援はニーズがある限り、私たちに出来ることは行っていくべきだと思います。

今回多くの体験をさせて頂きました。最後になりますが、このツアーに関わっていただいたすべての方に御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 2014CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン イオンディライト労働組合 壹岐 健

今回2014CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加するまでCSAの活動については中古衣料の活動だけでその他の活動は知りませんでした。

結団式をするまでに少し概要を見ましたが、自分の目で確かめて来る事が私の使命と思い、また帰って伝える事をしようと思いツアーに参加させて頂きました。

たくさんの視察や交流をして、自分の目で確かめることが出来たのも今回の事務局、そして7名のツアーのメンバーのおかげです。行く前はタイの情勢が不安定で行くのも心配でしたが、行ってみると1週間の予定も無事（？色々ありました）乗り切ることが出来たと思います。このチームだからではないかと感じています。そしてラオスでの通訳・コーディネーターのフンペンさん、佐古商店のエーさんがラオスの事を教えてくれたり、食事を心配してくれたり、また友情の証を送ってくれたり、様々なおもてなしをしてくれました。本当に感謝です。



ソムサバット村小学校(第4番目校)  
小学生と折り紙の交流

また現地の子ども達（小学生）は日本の折り紙を持って行って教えると楽しそうに遊んだり、またその折り紙で作ったものをアレンジして、さらにいいものを作ったりと想像力豊かで生き生きとした目が忘れられません。

CSA高校寮の卒業生は、たくさんの夢を語ってくれました。自分達の高校生時代を思い出すことが出来ました。

最後にこんな貴重な経験をさせて頂き、事務局・ツアーメンバー・現地協力者の方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 2014ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン ソラストユニオン 田中英二

ソラストユニオンでは、代々新しく赴任した専従者がこのツアーに参加するという慣習（？）があり、1年前に赴任した自分が今回のツアーに参加することになりました。CSAの活動については、評議員会に出席したり救援衣類の担当をしたりしているので、ある程度は把握しているつもりでした。

しかし、実際にツアーに参加して、話を聞くのと実際に自分の目で見るのではこんなにも違うのかと痛感しました。まさに「百聞は一見にしかず」でした。

今回のツアーの目的は、CSAが建設寄贈した小学校や高校生寮の視察、救援衣類の配布状況の確認等を行うことです。

まず、小学校については2校訪問させていただきましたが、どちらの校舎も想像以上に老朽化していることに驚きました。屋根には大きな穴が開いており、雨漏りする中、机をずらしながら勉強すると伺いました。日本では到底考えられない環境でも、一生懸命勉強している子どもたちのひたむきな姿を見て、忘れていた何かを思い出すそんな気持ちになりました。CSAが寄贈した学校は23校ありますが、補修を含めた学校建設の取り組みは、子どもたちにとって本当に必要な活動だと実感しました。また、小学校では生徒たちと折り紙をして交流を図りましたが、みんな呑み込みが早い事。複雑な「鶴」も簡単に覚えてしまったのには驚きです。子どもたちの無邪気な笑顔にたくさんの元気をいただきました。



高校生寮で

サンティパーブ高校生寮では、歓迎の踊りやバーシー・セレモニーを受けました。年頃の学生が、親元を離れて勉強するだけでも大変なのに、伝統的な文化も熱心に学んでいるその姿勢に感動しました。寮生と一緒に踊ることになり、初めは着込むほど寒かったのに最後は汗だくになる

程ノリノリに踊ってしまいました。また、保健省の計らいで寮生に直接救援衣料を手渡ししてきたことも非常に良かったです。この寮では、近隣に高校が無かったり、家庭が貧しいなどの理由で優秀にも関わらず高校に進学出来ない学生を受け入れ、大学進学や留学等、ラオスを担う優秀な人材育成に役立っています。但し、寮の老朽化が激しく、今後維持していくためにも今迄以上の支援が必要だと感じました。

救援衣類保管倉庫では、実際にどのように保管され、どのように仕分けされ、誰に渡されるのかを自分の目で確認することができました。倉庫では、支援団体から送られてきた衣類の入った大量の段ボールが保管されていました。残念ながら自分たちの送った段ボールは確認することができませんでしたが、参加メンバーの段ボールを見つけ共に喜びました。衣類の量に対して、仕分けするスタッフが少ないと感じましたが、想像よりしっかりと管理されている印象を受けました。これ程の衣類を管理するのは大変な労力が必要であり、送る側としても衣類の分類をしっかりとる等、出来ることはきちっとやらなければいけないと感じました。また、小さな子どもにぬいぐるみが喜ばれることや、冬物は必要だけどロング丈のコートはこちらの生活に合わない等の説明を受けました。ぬいぐるみは税関上の問題で難しいですが、現地で聞いた生の声を日本に持ち帰り、今後の救援衣類の募集活動に活かしていきたいと思います。また、今回のツアーで初めて陸路で国境を渡り、ノンカイ（タイ）の障がい者職業訓練センターを訪れました。衣類の引き渡し式が想像以上に盛大なセレモニーで正直驚きました。村人一人ひとりに衣類を手渡し、感謝されたことは一生忘れることができません。バンコクやヴィエンチャン等の都市部は自分の想像以上に発展しており、中古衣類の必要性に疑問を感じることもありましたが、地方ではまだまだ救援衣類を必要としている事を確認できました。

他には、30年以上活動を続けるNPO法人AARジャパンを訪れ、クラスター爆弾の不発弾処理やその被害者支援を続ける日本人の方に、その活動内容を伺いました。特に不発弾処理には100年以上かかる事を伺い衝撃を受けました。タイ・ラオスの日本大使館や省庁訪問では、それぞれの国の特性や抱えている問題について、それに日本がどのように関わっているのか知ることができました。同じアジアの一員としてお互いに良い関係を構築していくことが重要であると感じました。

今回のツアーで、CSAの活動は世界のために役に立っている事や、私たち労働組合の活動も「小さな力ではあるけれど、皆が集まれば大きな力になる」という労働運動の原点を改めて認識することができました。現地で見聞したことや感じた事は日本に持ち帰り、今後の活動に活かしていきたいと思います。

最後に、今回のワーキング・スタディ・ツアーの参加にあたり、CSA事務局並びに現地関係者、参加メンバーの皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

# CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工労働組合 三 島 慎 太

今回、CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加させて頂き、ラオスの人々の生活ぶり、教育事情、CSAの現地での活動状況など、見て感じたことを書かせて頂きます。

まず、ラオスの人々の生活についてです。自分は、このツアーに参加する前にラオスについて調べ、2011年のデータで「国民の約77%が1日2ドル以下で生活している」ということを知りました。実際、どんな暮らしをしているのだろうか?と思いながら、二つの小学校の訪問の際、片道約4時間の車窓から、通り過ぎるいくつもの地方の小さな農村を見ていました。その車窓越しに見る風景は、今は乾季のため緑は少ないものの、庭先で芋を干す風景、庭先や田で牛や鶏を飼う風景、子どもが大人を手伝っている風景など、(自分は生まれてないので実際には見ていませんが)昭和の前半の日本の風景を見ているような、のどかで平和そうな暮らしをしているのではないかな、と感じました。

しかし、農村地方の人々は自給自足のような暮らしをしているようで、食生活等には苦はないようだが、豊かな暮らしをするには、まだまだ足りないものが多くありそうに見えました。小屋のような家が多かったり、電線自体は村の上空を通っていても、すべての家には電線が引き込まれてなかったりなど、車窓から、ほんの一部かもしれませんが、大変そうな生活の一端垣間見ることができました。



国境越え

首都ヴィエンチャンでは、日本政府などからの援助(ODAなど)によって、かなり発展した部分もみられますが、地方に行けばまだまだ発展していないのが実態だと感じました。CSAの活動は、このような地方の方々に役立つ活動をしており、現地からは喜ばれているのではないかと思います。

その活動のひとつである小学校の建設については、今回のツアーで2か所訪問しましたが、両校とも寄贈から15年ほ

ど経過したことにより、屋根の破損等、傷みの激しい箇所が見られ、また、トイレや水道等にも不具合をきたしている状況も聞かれました。たった15年でこんなに古くなってしまおうというのはとても残念であり、また、子ども達の学ぶ環境を維持していくためにも、今後は新設のみならず、寄贈済みの小学校のフォローに重きを置いていく必要性を感じました。(子どもは大人にとって宝であり、本来ならば村人たちが資材等を出し合って学校を維持してくれるのが理想だと思うのですが、上述のような生活環境では、そのようなことも無理なのかもしれません)

同様に、学生たちに学ぶ場を提供しているサンティパーブ高校寮でも、あまり施設を見る時間がなかったため住環境は分かりませんでしたが、こちら水道やトイレに問題があるとの話しが聞かれました。学生たちは、自分達のことはなるべく自らしようとしているようで、寮のまわ

りで野菜を育てたり、鶏を飼ったりしているそうですが、さすがに設備面までは無理だと思いますので、こちらも何か手当てが必要なのではないかと感じました。

自分も15歳の時から親元を離れ、寮生活をしながら学校へ通っていた経験があり、勉強を互いに教え合ったり、生活面でも助け合ったりなど、寝食も苦楽も共にする寮の良さを知っていますし、高校寮卒業生で日本に留学する方もおられるとの事でしたので、ぜひ今後もこの活動は続けていってほしいと思いました。

また、救援衣類については、ラオスとタイと両方の倉庫を訪問しましたが、ラオスでは、今年度送付した約3000箱の衣類のうち、すでに1000箱ほどを救援衣料として北部の寒い地方へ送ったとのことであり、また、タイの衣類倉庫ではすべて一度ダンボールから出して仕分けし、種類・数量等細かく仕分けして、必要とされているところへ分配されており、役立っているのが分かりました。

自分は、現地を訪れる前は、衣類が中古で喜ばれているのだろうか？という疑問もあったのですが、ラオスの地方の風景や、人々の暮らしぶりを見て、中古でも充分喜ばれているのだらうと思いました。

ただ、タイでは丁寧に仕分けをしていたのに対し、ラオスではその様子が見られなかったため、必要なものが必要なところへ届けられているのか（男性用、女性用、子ども用、夏服・冬服等）今後確認していく必要があるのではないかと思います。

また、救援衣類の輸送資金の面について、ツアーの道中で事務局の山岡さんが資金不足の旨の話をしておりました。自分はCSA定期総会に出席したことがあるので実情は前から知っていましたが、一般組合員レベルでは大半がそのことを知らないと思います。「中古衣類の寄贈」という行為自体は、一般組合員からは参加しやすい取り組みではあるものの、「輸送募金を出す」ということは抵抗感がある人も少なくないと思います。この活動を今後も続けていくためには、衣類と輸送資金をセットで募集するなど、カンパを集める工夫がもう少し必要だと感じました。

ラオスでもタイでも、政府機関・教育省・保健省など、対応各部門の上層部の方々に対応頂きました。これはCSAが長年活動を続けてきて、活動が現地で歓迎され、信頼関係が築けているからこそその現地の手厚い対応ではないかと感じました。CSAの活動は、他の団体に比べると小さい活動かもしれませんが、今後も続けていってほしいと思いました。

最後になりましたが、事務局の山岡さんはじめ、ラオスで対応して頂いたエーさん、フンペンさん、そして珍道中を繰り広げた参加メンバーのみなさん、大変お世話になりました。またお会いして、思い出話に花を咲かすことができたらと思います。また会いましょう！ありがとうございました。





## 2014ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 IHI労働組合連合会 酒 向 真 澄

IHI労連からは、毎年ワーキング・スタディ・ツアーに参加していますので、毎年報告を受け、ある程度の知識はありました。でも、実際に自分で見て、交流して、報告書では感じられなかったことが、数多くありました。

まずは、小学校視察ですが、今回は、ソムサバット村小学校（第4番目校）、トナミ村小学校（第6番目校）を訪問しました。IHIでの報告書、ならびに昨年のCSAワーキング・スタディー・ツアーの報告書



ラオス教育・スポーツ省で

を見ていましたので、ある程度の歓迎は予想していましたが、実際自分が、現地で歓迎されてみると、報告書以上の歓迎で驚きました。

校長先生はじめ、先生方が連合・CSAのおかげで学校が出来、教育を受けられなかった子どもたちが、多くの地域で教育が受けられるようになった、感謝していると、また、子どもたちと交流して（今回は折り紙を教えながら）「勉強は好き？」と尋ねると、「好き、学校は楽しい」と笑顔で話してくれました。大人も子どもたちも、連合・CSAの活動、また、援助に対して感謝していると強く感じました。

CSA寮では、生徒や先生たちが整列をしてお出迎え、ラオスの民族舞踊や歌で歓迎してくれました。日本では、当たり前のように学校に行っていますが、この学校の生徒は、親元を離れ一生懸命勉強をして、ラオスの国のためにと熱意を感じました。それは、このCSA寮の卒業生たちとの、交流会でも強く感じました。

この様な、一生懸命な姿を見ると、連合・CSAの活動に携わってきて、良かったと思いました。

ただ、残念なのは、校舎・寮の雨漏り・老朽化・トイレの不衛生が目につきました。連合・CSAの活動がこれだけ感謝されているのに、修理する資金が無いから直せないという、雨が降った日は、机をずらして濡れないようにして授業をしているという。学校を新設するのも大事なことだが（まだまだ学校が不足している事実もあるから）、校舎の老朽化を見てしまうと、補修の必要性も感じました。

また、救援衣類についてですが、各訪問先で歓迎され、すごく感謝されていると実感しました。救援衣類は、特に山岳地方は非常に寒く、衣類が買えない家族が多く、連合・CSAの援助が非常に役立っていると感謝されました。

救援衣類保管倉庫を訪問すると、ラオスもタイもそうですが、段ボールが山積みになっていました。この量からみても、CSAの活動はすごいと感じることが出来ました。

ただ、残念なことは、タイでは夏物・冬物・大人用・子ども用・男性・女性と山のような衣類

を仕分けし、配布しているのですが、人手不足で衣類が必要な人に亘るまで時間が掛かってしまうのが現状であると説明を受けました。

今回の、ツアーを通じ感じたことは、ラオスには、まだまだ支援が必要だということです。これまでも現地の声を聴いて、改善してきたと思いますが、今後も更に支援を受ける人、現地でこの活動に携わっている人の声を聴き、改善をしていかななくてはと思います。

全てが現地の要望通りにはいかないと思いますが、CSAとして各産別に協力要請を出し、理解していただき、少しずつでも現地の要望に応じていくように改善して、今後も活動を継続していただくことを望みます。

最後に、現地でお世話になった、フンペンさん、エーさんありがとうございました。

また、事務局の山岡さんご苦勞様でした。そして、ありがとうございました。

今回のツアーに参加した頼もしい仲間、沼さん、けんちゃん、えいちゃん、ミートゥー、はまちゃん、そして、紅一点スゥーンさん、いろいろとお世話になりありがとうございました。

## 2014 CSAワーキング・スタディ・ツアーを終えて

基幹労連 JFEスチール福山労働組合 濱本将矢

今回のツアーを終えて、まずは、CSA事務局、共に参加した仲間たち、そして現地関係者に対し、心よりお礼を申し上げます。

振り返りますと、CSAワーキング・スタディ・ツアーの参加要請が来たときは、CSAの存在自体を知らなかったことや、タイ・ラオスについても一度も足を踏み入れたことがなく、不安がよぎる心境だったことを思い出します。

参加が決まり、事務局から資料を送付していただきましたが、内容を確認すると、私たちの支援の方向性を知ることができ、また、CSAの活動の歴史を知ることができました。

結団式に臨むときは、不安が期待に変化しており、高揚した状況でラオスにむかいました。

### 【小学校を訪問して】

ラオスに渡って、最初の行事としては、CSAの支援によって建設された小学校の訪問でした。第4番目に建設されたソムサバット村小学校では、学生と折り紙による交流を実施しました。

その後、第6番目のトナミ村小学校に訪問し、先生や村長と意見交換を実施しました。

共に、建設時から時間も経過しており、雨漏れなど老朽化に悩んでいました。

材料費があれば、村と力をあわせて自己修繕できるとのことですので、今後のフォローが必要であると感じました。



高校生寮で

【ラオス保健省救援衣類保管倉庫を訪問して】

CSAからの救援衣料が集約されている倉庫を見学しました。山の中から、自分の組織の箱がないか競争で探しました。多くの団体から支援がきており、気持ちがしっかり届いていることを再認識しました。

【サンティパーブ高校CSA寮 卒寮生および寮生との交流を通じて】

CSA高校卒寮生との交流は夕食を交えてSAKO商店で行いました。寿司や刺身など日本食がメインであり、ゲームなどを交え盛り上がりました。その中で、印象的だったのが、皆がラオスを愛しており、日本に留学や働きにでる卒寮生もいましたが、最終的には、祖国に帰り、国のために貢献したいと言っていたことです。

現役寮生との交流については、寮に出向き、踊りを交え交流しました。まずは、バーシーと呼ばれる儀式を行い、ツアー参加者の歓迎と健康を祈り、両手首に紐を結んでくれました。寮生全員が真剣に祈ってくれる姿に感動しました。そのあと、寮生からラオスの踊りが披露されました。ラオスのみなさんは祭りが大好きと聞いていましたが、そのとおりでした。気がつけば、全員が一緒になり息を切らせながら踊り、そこには言葉は必要ありませんでした。

そのほかにも今回のツアー日程を通じて、さまざまな場所に訪問し、ラオスやタイの文化や歴史を体験することができました。タイ・ラオスの日本大使館では、ラオスは、餓死者がいないなど治安の面では非常に良い反面、ベトナム戦争による不発弾や地雷により、いまだに死者がでていることや、タイでは、バンコクを中心に経済成長しているものの、地域格差の拡大、少子化問題など、さまざまな問題を抱えていることなど、現地の事情を詳細に説明いただきました。その他の訪問先においても、私たちを大歓迎していただき、貴重なお話を聞くことが出来ました。短期間での多くの経験や出会いにより、参加者全員がタイ・ラオスを好きになり、また、今後の支援に意欲が沸いたと思っております。

最後になりますが、私たちが感じた経験は、伝えていくことが一番重要であり一番難しいことでもあります。大きな輪にしていくためにも、身近な活動を積み上げていきたいと思えます。



卒寮生と(佐古レストランで)

## 編 集 後 記

今回のスタディ・ツアーは、バンコクでの反政府運動について過激と思われるような報道されていたので、参加者はもとより参加組織やご家族は大変心配されたと思います。そのような中で、メンバーは無事に任務を終えて、帰国することができました。スタディ・ツアーの内容は記載のとおりですが、今回の特徴や気づいたことを記載してみました。

救援衣類を送る運動では、ヴィエンチャンからメコン川にかかる友好橋（国境）を渡り、タイのノンカイでの救援衣類引渡し式に出席することができました。また、ラオスの衣類倉庫では、「今年は異常気象で北部では朝夕とても寒かったので、衣類が届くとすぐ北部に大量に送ることができた。できれば、冬物、夏物の表記が箱に書いてあると助かる」という要望を受けました。タイの衣類倉庫では、「衣類は種類や枚数をきっちり管理している。一部だが、差し上げられないような衣類が入っていることもある」という報告を受けました。夏物と冬物の表記は次回に入れたいと思います。また、CSA寮でも、衣類を直接寮生に手渡すことができました。

学校建設の取り組みでは、第4番目校を訪問し、折り紙交流で子ども達の笑顔を見ることができましたが、校舎は老朽化して、屋根修理の必要性が感じられました。また、第6番目校では、子ども達が試験休みでとても残念でしたが、15年前に建設してから初めての訪問でしたので、とても意味のある訪問でした。これまで2回の台風で屋根が飛んでしまって、修理したものの雨漏りが激しいこと。トイレがあるものの、全く使えない状況であることがわかりました。小学生の試験休みについては、事前に確認しておく必要があると思いました。

高校生寮では、バーシーセシモニーや寮生との踊りを通して交流できましたが、寮生との意見交換や施設見学の時間も確保できるような時間配分が必要だったと思います。また、佐古商店でラオス国立大学に進学した卒寮生と交流しましたが、皆「今自分があるのは、CSA寮があったおかげ」と口々にCSAに感謝していたのが印象的でした。

参加者アンケートのご意見等を参考にしながら、できる限りワーキングスタディの内容の向上を図っていきたいと考えていますので、引き続きご意見・アドバイス等をお願いします。今回は、新米事務局長だったので頼りなく思われたと思いますが、参加者や参加組織の担当者、現地協力



エーさんと佐古さんと(佐古商店で)

者の方々のお陰でなんとか役割を果たすことができました。本当に感謝申し上げます。参加者は、ラオスとタイで、実際にCSAの取り組みを見たり、現地の人々と交流や意見交換する中で、多くの経験をしたと思いますので、今後の活動に活かして行って下されば幸いです。また、この報告書により支援組織や支援者の皆様にCSAの活動について、より理解していただけることを期待しています。

アジア連帯委員会(CSA) 山岡みゆき

## ラオスでの小学校建設実績一覧

2014年1月現在

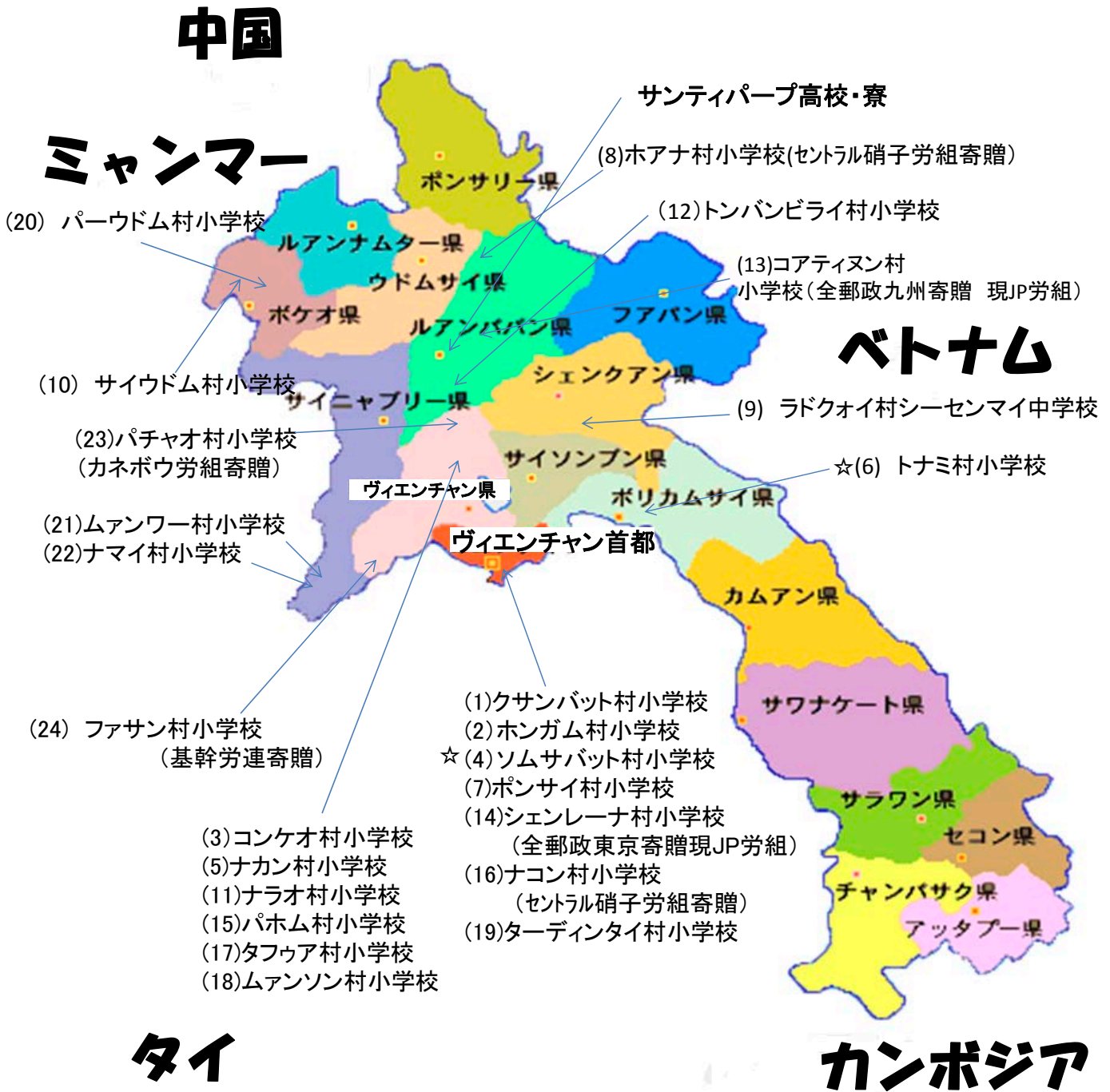
番号	校名	場所	引渡年
1	クッサンバット Khoutsambat	ヴィエンチャン首都サイタニー地区クッサンバット村	1995年
2	ホンガム PhonNgam	ヴィエンチャン首都サイタニー地区 ホンガム村	1996年
3	コンケオ KhonKeo	ヴィエンチャン県ホンオング地区 コンケオ村	1997年
4	ソムサバット Som Savat	ヴィエンチャン首都パクグム地区 ソムサバット村	1998年
5	ナカン Nakan	ヴィエンチャン県フェング地区 ナカン村	
6	トンナミ Thongnamee	ボリカムサイ県パカディグ地区 トナミ村	1999年
7	ポンサイ Phonxai	ヴィエンチャン首都サイタニー地区 ポンサイ村	
8	ホアナ ※ Houa Na	ルアンパバン県ナムバク地区 ホアナ村 (セントラル硝子労組寄贈)	2000年
9	シーセンマイ ★ Xisenmay	シェンクアン県ペク地区 ラドクオイ村	
10	サイウドム Xayudom	ボケオ県パーウドム地区 サイウドム村	
11	ナラオ Nalao	ヴィエンチャン県ポンホン地区 ナラオ村	2001年
12	トンパンビライ Thongpiengvilai	ルアンパバン県ナン地区トンパンビライ村	2002年
13	コアティヌン ※ Khouathinung	ルアンパバン県ルアンパバン地区コアティヌン村 (全郵政九州寄贈)	2003年
14	シェンレーナ ※ XiengLe Na	ヴィエンチャン首都パクグム地区シェンレーナ村 (全郵政東京寄贈)	2004年
15	パホム Pha hom	ヴィエンチャン県バンビエン地区 パホム村	2005年
16	ナコン ※ Nakhoun	ヴィエンチャン首都ナサイソン地区 ナコン村 (セントラル硝子労組寄贈)	2006年
17	タフウア Thaheua	ヴィエンチャン県バンビエン地区 ターフウア村	
18	ムアンソン Mouangxong	ヴィエンチャン県バンビエン地区 ムアンソン村	2007年
19	ターディンデンタイ Thadindeng Tai	ヴィエンチャン首都サイタニー地区 ターディンデンタイ村	2009年
20	パーウドム Pha Udom	ボケオ県パーウドム地区 パーウドム村	2010年
21	ムアンワ Muanva	サヤブリー県パクライ地区 ムアンワ村	2010年
22	ナマイ NaMai	サヤブリー県パクライ地区 ナマイ村	2011年
23	パチャオ ※ Phachao	ヴィエンチャン県カン郡 パチャオ村 (カネボウ労組寄贈校)	
24	ファサン ※ PhaSang	ヴィエンチャン県 フェン郡 ファサン村 (基幹労連寄贈校)	2013年着工 2014.5引渡し 予定

備考:①※印:寄贈校、★印:中学校

②校舎:10m×42m(1棟5教室+1職員室+トイレ)、コンクリート敷

# ラオスにおけるアジア連帯委員会(CSA) 教育事業 — 小学校建設地

2014年1月現在



備考: ☆印は今回訪問した小学校

<参 考>

「第30次救援衣類を送る運動」での集荷量と送付内容について

2013年10月7日(月)～11日(金)に集荷した救援衣類の集荷量、送付内容は下記のとおり。

◆集荷量 (正味)

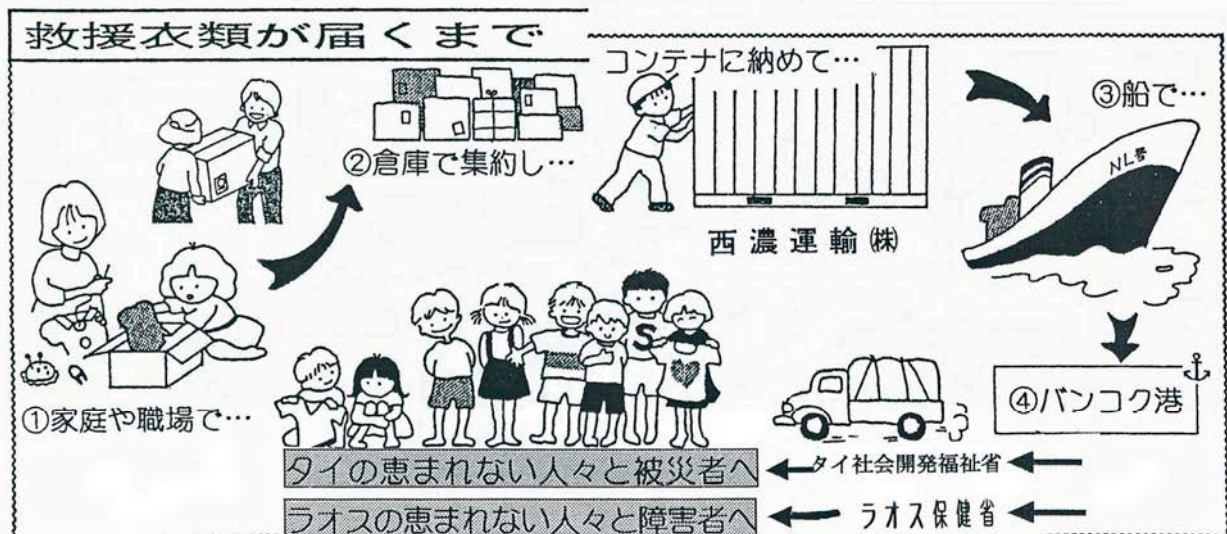
2013年度実績：約193トン (193,620 Kg)、9,681箱、40Fコンテナ16本

◆送付内容

輸送先	ラオス	タイ	計
コンテナ本数 (40ft)	5本	11本	16本
カートン個数	3,051箱	6,630箱	9,681箱
発送重量	61,020 Kg	132,600 Kg	193,620 Kg
出港日	10月14日	10月20日	
到着日	10月24日 (バンコック港着)	11月3日	
	11月2日 (ビエンチャン着)		

備考：2012年度

集荷量：約141トン (141,222 Kg)、9,844箱、40Fコンテナ14本



ソムサバット村  
小学校  
(第4番目校)



天井の傷み



図書室でサムペツ校長と



折り紙で交流



教室内



トナミ村小学校（第6番目校）



傷みが激しい天井



寄贈板



ブンジャン校長先生と先生たち



使えないトイレ



お土産

## **2014年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書**

発行日 2014年3月

発行者 アジア連帯委員会 (CSA)

事務局長 山岡みゆき

〒105-0014 東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14階

Tel (03) 3769-4177 Fax (03) 3769-4178

メール：info@ngo-csa.jp

印刷 株式会社コンポーズ・ユニ

Tel (03) 3456-1541 Fax (03) 3798-3303

